

受動表現の指導と 「拡大文型」の試み

前田直子

◆要旨

形態的・統語的・意味的・機能的に難易度の高い文法項目である受動表現の指導について考察するため、シナリオをデータに使用調査を行い、主に単文・複文という観点から分析した。受動表現は85%が複文の主節または従属節の述語として用いられ、特に「ほめられてうれしくなった」のような「て」節述語に表れる場合が全体の4分の1を占めた。また、これらの結果を既存の日本語教材の例文と比較し、違いを考察した。シナリオには多様な表現が見られたが、それは既習の文法項目との組み合わせである。適切な既習項目と組み合わせた「拡大」文型練習を取り入れることで、受動表現の機能を理解し、より自然な文を産出できるようになることが期待される。

◆キーワード

受動表現、単文、複文、従属節、拡大文型

◆ABSTRACT

The passive expression is thought to be one of the most difficult grammatical items for elementary and intermediate learners. The aim of this paper is to research on the passive expressions in scripts for films in terms of whether they appear in simple sentences or complex sentences and to compare those in a Japanese language textbooks and a reference book. The 85% of the passive expression in scripts are used in complex sentences, and 25% are in the *te*-form clause. These results indicate that to practice passive expressions in complex sentences and with the combination of various kinds of other grammatical items can help the appropriate understanding and natural production of the passive expressions.

◆KEY WORDS

Passive, Simple Sentence, Complex Sentence, Clause, Expanded Sentence Pattern

Teaching Passive Expressions in Expanded Sentence Pattern

NAOKO MAEDA

1 はじめに

動きや出来事を、動作主を主語として表す能動態に対し、動作を受ける対象を主語として表す受動態は、日本語教育においては一般に初級後半で導入される。受動態は、その表す出来事自体は能動態の場合と同じであり、たとえば次の2つの文は、同じ出来事を描いている。

- 1) 兄は私を叱りました。
- 2) 私は兄に叱られました。

この2つの文の違いや、1)ではなく2)のタイプの文が必要であること、すなわち受動文の存在意義や機能は、単文のレベルを超えた連文(テキスト・談話)の観点から説明する必要があることは既に広く認識されているが、初級学習者向けにどのように説明できるのか、現実的には問題がある。

受動表現が持つ難しさとしては、動詞の形態変化、助詞の交替、そして直接受身・間接受身・持ち主の受身などと称されるさまざまな意味・機能的なタイプ分けの問題があり、数多くの研究が蓄積されているが、本稿は先行研究とは異なり、受動表現が文中に出現する位置、具体的には、単文に出現するか、複文に出現するかを実証的に調査する。それによって、受動表現の新たな特性を探ると共に、日本語教育への応用についても考察を試みる。

2 調査概要

2.1 言語データとしてのシナリオ

今回使用した言語データは、映画『男はつらいよ』(1~8、10~20、22~27)の25作のシナリオである。ここに出現した受動表現を全て抽出・分析する。

近年、コーパスによる大量の言語データを使用した帰納的・実証的な研究が進展しているが、研究目的に合ったコーパスをどのように選定するかは大きな

問題である。話しことばを重視する日本語教育研究では、自然談話が最も価値があるとされる傾向があるが、学習者のモデルとして自然談話が最適なものか、検討の余地があると思われる。自然談話は言語以外のさまざまな情報に支えられたコミュニケーションであり、多くの点で「不完全」な発話でも許される余地がある。また、自然談話には、母語話者であっても、年齢、性別、地域などによってバリエーションがあり、さらには同一の話者であっても、対話の相手や状況によってバリエーションがある。そのような中からどの学習者のモデルにもなるような自然談話を選定することは非常に難しい問題である。

一方シナリオはあくまでも話しことばを擬似的に創作したものであるが、実際の話しことばよりも統制され整えられて、種々の夾雑物が排除されている点で、むしろ学習者にとっては参考となる言語表現が多いのではないだろうか。

こうした観点から、本研究ではシナリオを資料として使用することとする。

2.2 受動表現の分類と調査結果の概要

受動表現の認定としては、動詞の語幹に(r)areruを接続させた形態であり、能動形に戻せるものを受動表現と認定した。可能・尊敬・自発(思い出される・思い返される)は除き、また、受身形のみが慣用的に用いられると考えられる「(先が)思いやられる」、名詞化した「憎まれ(役)」「お呼ばれ」「とらわれ(の身)」等も排除した。

次に、受動表現として認定・抽出した文を、その出現位置により、次の6種類に分類する。

- ①単文末に現れる場合
 - 3) 私は兄に叱られた。
- ②複文後行節(=主節)に現れる場合
 - 4) 陽子は夜遅く家に帰り、兄に叱られた。
- ③引用節に現れる場合
 - 5) 陽子は兄に叱られたと言った。
- ④疑問節に現れる場合
 - 6) 陽子が兄に叱られたか、わからない。

⑤連体的複文先行節 (=連体修飾節) に現れる場合

7) 兄に叱られた陽子は、大声で泣き出した。

⑥連用的複文先行節に現れる場合

8) 兄に叱られて、陽子は泣き出した。

受動表現の出現位置から言えば、①が単文、②以下が複文での出現となる。なお、③引用節・④疑問節については、引用節自体が複文となり、受動表現がその先行節・後行節に出現することも予測されるが、今回採集された例は全て単文であった。また、前田 (2009) の複文分類に従い、⑤連体的複文先行節には形式名詞を修飾する補足節を含め、また⑥連用的複文先行節では、従属度の高い副詞節と従属度の低い等位節・並列節との区別をしない。

今回のシナリオ調査で抽出された受動表現は426例であり、①から⑥に分類した結果は、次のようになった。

表1 シナリオ調査の結果

文末	単文	① 単文末	65	15%
		② 複文末	55	13%
非 複 文 末	複文	③ 引用節末	7	2%
		④ 疑問節末	3	1%
		⑤ 連体節末	73	17%
		⑥ 連用節末	223	52%
計		426	100%	

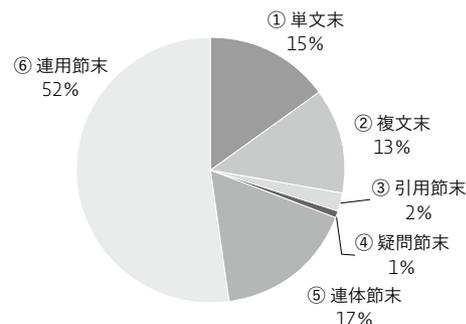


図1 シナリオ調査の結果

この結果から、まず受動表現は非文末が全体の4分の3を占めること、特に連用節末での出現が半数を超えることが注目される。以下、具体的に確認していくが、次節では、用例数の少なかった③④を除く①②⑤⑥を取り上げる。

3 受動表現が使われる単文・複文

3.1 単文末に現れる場合 (65例: 15%)

日本語の教科書では「私は兄に叱られました。」のような受動文が導入の際に練習されるが、本稿で調査対象とした『男はつらいよ』のシナリオでは、そのような単純な文末の受動表現は次の4例を除いて出現しなかった。

9) 源公：やられたー!

10) 巡査：イタタタ……やられた! 敵は手強いぞ。

11) 寅：この世に生を受けた男と女、みんなその見えない糸によって結ばれています。

12) 岡倉：……は次の波動方程式によって支配されております。

9)・10) は「やられた」という慣用的な感動詞的表現であり、11)・12) は対話ではなく、講演調の独話に近い場合である。

多くは、次のように、様々な文末のモダリティ形式と共に使われる。

13) 社長：あーあ、俺も誰かにやとわりたい、ボーナス貰いたい(=受動+たい)

14) 竜造：さくらはなあ、断わられたんだよ、縁談を! (=受動+の+だ+よ)

15) 親爺：あげくの果てにゃあ、ストリップか何かに売り飛ばされちゃうんじゃねえかなあ。 (=受動+てしまう+の+だ+じゃないか+なあ)

特に多く出現したのは「のだ」で、半数近い29例に共起した。また終助詞を伴う例が25例(うち「か」は6例)あった。その他「だろう、ものだ、かもしれない、ことだ、ばかりだ、こともある」などが出現し、95の文末表現が出現した。1受動表現あたり平均で1.46 (=95/65) の形式が付加していることになる。

中でも、「てしまう」と共起する例が10例あったことは注目される。

- 16) 夏子：あたし夕べ、お父さんに叱られちゃった。
 17) 寅：ああ、おいちゃん。—あ、何だい、みんな来てたのか。こらちょっとまずいとこ見られちゃったなあ。こら。—

最後に、テンス・アスペクトの現れについて、確認しておく。単文に出現した文末のテンス・アスペクト表現は次の通りであった。

表2 単文末におけるテンス・アスペクト形式

る	た	ている	ていた	計
19	35	10	1	65

「た」が多いのは予想の通りで、半数を超えていた。だが、注目されるのは「る」で、未来の望ましくない出来事について述べるほか、警告を発したり、習慣的な事態について非難したりするような場合に出現することが多いようである。

- 18) 竜造：あーあ、また竜野の話聞かされるのか
 19) 夏子：お父さん、お医者さんにしかられるわよ
 20) 寅：またお説教か。そこが大学教授の悪いくせなんだよ。だから女に振られるんだぞ、お前

3.2 複文末（複文主節末）に現れる場合（55例：13%）

複文の主節末に現れる場合は55例であり、その複文は、連用節を伴う場合（例21）、連体節を伴う場合（例22）、引用節を伴う場合（例23）があった。さらに連用節と引用節が出現する場合（例24、25）が5例、連体節と引用節が共起する場合が1例（例26）あったが、文の構造を考慮し、前者は連用節に、後者は引用節に分類した。

表3 複文末に受動表現が現れる場合に先行する従属節

連用節	連体節	引用節	計
39	6	10	55

- 21) 寅：先生にみつかったらブンなぐられちゃうな
 22) 寅：こいつがね、大事に貯めた金をさ悪い奴にだまし取られちゃったんだよ、困っちゃってな、
 23) はい。でも私は父親似だと言われます
 24) 寅：うん、でもよ、不景気だから金が儲かるなんて言ったら、裏の社長にしかられるか。
 25) 雅子：退院する時、お医者様に、もう好きなようにさせてあげなさいって、言われたの。
 26) 博：もし兄さんが帰って来たら是非すすめてくれて言われてるんですよ、

この中で最も多く出現する連用節について、その内訳を見ると以下の通りである。用例数は全39例だが、例文27のように、1つの複文に複数の連用節を伴う場合があったため、連用節の数は51となった。

表4 複文末に受動表現が現れる場合に先行する連用節

て	たら	から	たり	と	時に	ば	連用中止	のに	その他	計
16	7	4	3	3	3	3	3	2	7	51

その他（各1例）：うちに、最中に、たって、ては、ても、ように、なかとに（方言）

この中で注目されるのは「て」節・「たら」節に受動表現が続く場合である。

- 27) ひとみ：気がついたらねタクシーに乗って運転手さんにジロジロ見られてたの
 28) 寅：先生にみつかったらブンなぐられちゃうな
 29) 田所：五年程前に、一度やめたんですよ。そしたらね、一時間もたたないうちに呼吸困難になりましたね、病院にかつぎ込まれました

複文主節に受動表現が現れるのは、文内の視点を統一させ、従属節と主語を一貫させるためと考えられているが（奥津1983、野田1991、など）、次例のように、主語が交替する例も1例見られた。

30) 澄夫：オフクロが怒りましてね、さんざんなぐられました…

この例では、従属節「オフクロが怒りましてね」が丁寧体になっており、終助詞「ね」も付加していることから、従属節の文的度合いが高い。そのため、主語が主節と異なっても違和感を感じさせないのではないと思われる。

3.3 連体節末に現れる場合 (73例：17%)

連体節の述語に受動表現が現れる割合は単文末と同程度で、それほど高くはない。連体修飾節に現れた受動表現については、まずその被修飾名詞が実質名詞か形式名詞かによって分類した。被修飾名詞が実質名詞か形式名詞かによって、同じ連体的な節でも、その文法的な機能が異なるためである。

形式名詞は「こと」「の」の他、以下のものが出現した。なお、経験を表す「ことがあった」、可能を表す「ことができる」、文末の「のだ」「ことだ」「わけだ」「はずだ」「ものだ」などは、形式名詞ではあるが、今回の調査では単文に分類した。それらを含めれば形式名詞の数はより多くなる。

表5 連体節末に受動表現が現れる場合の被修飾名詞

実質名詞	形式名詞							
40	33							
	こと	の	ほう	ほど(の)	うち	時分	くらい	だけ
	13	9	3	3	2	1	1	1

31) 礼子：でも、それはあとになって朝廷の命令で書かれた本だから、歴史的には、あまり正確とは言えないのね

32) 竜造：へたすりゃ、一つや二つぶんなぐられる覚悟しておかなくちゃいけねえな

33) 貴子：今の寅さんみたいに言われたこと、私、生まれて初めてなのよ

34) 博：でも他人に同情されるのは嫌なんじゃないか、あの人は

35) つね：ちよいと、私に言わしておくれ、いいかい、寅さん、断わられたのは、あんたのせいなんだよ。

実質名詞の連体節と形式名詞の連体節が拮抗していることがわかる。ただし、それは受動表現が連体節に現れる際の特徴とは言い切れない。連体修飾一般に、実質名詞と形式名詞の割合がどのようになるか、今後の調査が必要である。また形式名詞に関しては、シナリオ（擬似の話しことば）にもかかわらず「の」よりも「こと」の方が多かったことが注目される。

3.4 連用節末に現れる場合 (223例：52%)

連用節の述語に受動表現が現れる場合は、受動表現全体（426例）の半数を超えた223例（52%）であり、受動表現の重要な働きが連用節の述語になることであることを示している。既に多くの指摘があるように、受動表現が従属節と主節の視点を一貫させる働きを持つことを裏付ける数値であるだろう。

具体的に出現した連用節の形式は、以下の通りである。

表6 受動表現が現れる連用節

て	ても	たら	から	ては(ちや)	と	たり	ので(んで)	たって	けど	ば	うちに	時に	のでは(んじや)	のだから	連用	ようと
102	15	14	13	11	8	6	6	5	4	4	3	3	3	2	2	2
各1例ずつ出現した20形式	後で、あまり、が、くらいなら、だけに、っぱなし、て以来、通り、ないで、ながら、のに、ままに、もので、ように、けん(方言)、で(方言)、助詞4(なんて、に(決まっている)、より、も(同じ))															

この中で注目されるのは、圧倒的に「て」節に受動表現が現れる場合が多い、ということであり、連用節全体の半数を占める。受動表現全体との比率を見ると、約24% (=102/426) であり、受動表現の4例に1例が「て」節の述語となっていることになる。しかもその「て」節は、後節に表される感情の原因(誘因)となる事態を表す場合がほとんどである。これは次に見る日本語教材・参考書との比較において、特に注意すべき点である。

- 36) 寅：こんな善意な人々にかこまれて、幸せだな本当にあの娘も
 37) 竜造：さくら、お前自分の兄貴の悪口言われて腹たたねえのか
 38) 寅：いじのわるい姑婆アと陰険な小姑にはさまれて、不幸せな日々を過しているんですよ、
 39) さくら：可哀想に酒のサカナにされちゃって
 40) 寅：モウロク爺イにいちいち文句いわれて働くこたあないんだよ

4 日本語教材との比較と日本語教育への応用

4.1 日本語教材に見られる受動表現の特徴

3節で見たシナリオに見られる受動表現の使用特徴は、日本語教育に用いられる教材においても同様なのであろうか。代表的な初級日本語教科書『みんなの日本語』、および参考書『教師と学習者のための日本語文型辞典』に現れた例文について、同様の調査を行った。

4.1.1 『みんなの日本語』

『みんなの日本語』では、第2巻の第37課において、受動表現が取り上げられている。出現した受動表現の例文は以下の通りである。

表7 『みんなの日本語』の受動表現

		①単文末				⑤連体節末
		る	た	ている	ていた	普通名詞
文型	3		3			
例文	11	3	6	2		
会話	2		1			1
練習A (1-7)	12	3	7	2		
練習B	42	6	31	5		
練習C	12		12			
計	82	12	60	9	0	1

「会話」に出現した連体節1例「ここは海の上を埋め立てて作られた島なんです」を除いて、全て単文末のみである。複文末・連用節末は出現せず、その点でシナリオ調査の結果と大きく異なる。文型の習得を主眼とした教科書においては、必要かつ当然のこととも言えるが、一方で、こうした偏りがやや不自然な受動文を産出させることにつながる可能性もあるだろう。

単文末において、「た」形のみならず「る」形や「ている」形も取り上げられている点は評価できる。ただし、「ている」形は、「日本の車はいろいろな国へ輸出されています」(練習A6・練習B7)のように物が主語となる属性叙述受動文(益岡1987)の場合に限定されており、偏りがある。

また、受動表現と「のだ」が共起する表現も取り上げられ、とくに練習C(対話型の練習問題)では3題ともこのタイプになっている。

- 41) 練習B 4 どうしたんですか。→ 足を踏まれたんです。
 42) 練習C 1 A 何かいいことがあったんですか?
 B ええ、鈴木さんにデートに誘われたんです。
 2 A 何かあったんですか?
 B ええ、空港で荷物を間違えられたんです。
 3 A このお寺はいつごろ建てられたんですか。
 B 500年くらい前に建てられました。

「のだ」と受動表現の組み合わせは学習者には負担の大きい練習となるが、シナリオ調査でも高頻度で出現し、特に過去テンス(た・ていた)の場合の共起度は非常に高かった。その点で練習Cは、話しことばにおける受動表現の1つの典型的かつ現実的な用法を適切に示していると言える。

4.1.2 『教師と学習者のための日本語文型辞典』

次に、多くの項目を詳細に取り上げ、広く使用されている参考書『教師と学習者のための日本語文型辞典』(以下『文型辞典』)に提示された受動表現の例文(「られる1」pp.632-634)を分析する。

『文型辞典』では、受動表現は表8のように3種6類に分類され、全部で29の例文と共に簡潔な解説が書かれている。それぞれの例文について、シナリオ調査と同様に分類すると、表9のようになる。

『文型辞典』には、引用節・疑問節の例は出現しなかったが、他の4つの位置の例文は全て出現していた。単文末の割合が多いことは『みんなの日本語』と同様である。だが連用節末の割合は、シナリオ調査には及ばないものの、高くなっており、複文末および連体節末の割合は、シナリオ調査に近い数値となっている。また連用節として「て」節が多く出現していることも一致するが、複文末の場合は「ので」節、「たら」節が使われており、シナリオ調査で最も多く出現していた「て」節が用いられていない点は異なる。

用法との関わりで見ると、直接受身(分類1)の例文が単文末に偏っており、また間接受身(2c・3b)においては、全ての例文が連用節末に出現している。間接受身の例文は単文では自然な文が作りにくいということかもしれないが、直接受身(1)でも連用節は多く出現する。また連用節として「て」節の他に「と」節が出現しているが、シナリオ調査で「て」に続いて出現し、初級学習者にはよりなじみがある「から」や「たら」の例はない。

なお「2b」の直接受身の箇所では、次のような興味深い例文と解説がある。

- 43) (1) おばあさんが犬にかまれた。
 (2) その子は母親にしかられて、泣き出した。
 (3) 彼女はみなにかわいがられて育った。

表8 『教師と学習者のための日本語文型辞典』の受動表現用例数

		用例数
1	NがVられる <直接受身>	5
2	a NがNに(よって)Vられる <直接受身2>	5
	b NがNに/からVられる <直接受身>	6
	c NがNにVられる <間接受身>	4
3	a NがNにNをVられる <所有者受身>	4
	b NがNにNをVられる <間接受身>	5
		29

表9 『教師と学習者のための日本語文型辞典』の受動表現

		①単文末				②複文末		⑤連体節末		⑥連用節末	
		る	た	ている	ていた	ので	たら	実質名詞	形式名詞	て	と
1	5	2	1	1			1				
2	a	5	2	3							
	b	6	2			1	1			2	
	c	4						1		3	
3	a	4	2							2	
	b	5							1	1	3
計	29	2	7	4	0	1	1	2	1	8	3
		13				2		3		11	

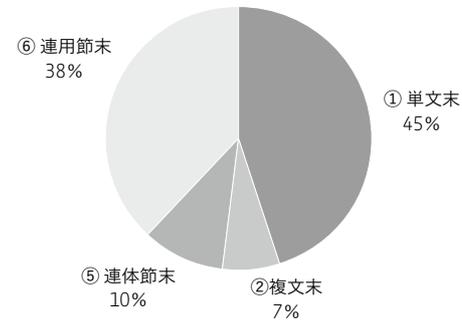


図2 『教師と学習者のための日本語文型辞典』の受動表現

- (4) 森さんは知らない人から話しかけられた。
 (5) 彼は正直なので、だれからも信頼されている。
 (6) 夜中に騒いだら、近所の人に注意されてしまった。
 (前略) 話し手がかかわる行為の場合は、話し手の視点から述べるために受身が使われることが多い。また一つの文は一人の人の視点から述べられるのが普通。
 (誤) 夜中に騒いだら、近所の人注意した。
 (正) 夜中に騒いだら、近所の人に注意された。
 (『教師と学習者のための日本語文型辞典』 p.633)

この部分は、受動表現が「視点」の一貫性 (= 「一人の人の視点」) を保持する機能を持つことを指摘した優れた解説である。だが同様の働きは、受動表現が連用節末に現れ、かつ三人称が主体である例文 (2) (3) にも通じることである。

4.2 文型を「拡大」していくことについて

初級日本語教材は文型シラバスに基づいて作成されることが多く、新たな文法項目 (文法) を導入する際にはできるだけその項目のみを使用した文、いわば「単純な文」「純粋な文」を例文として提示する。それ自体は当該項目の基本構造 (基本文型) を理解・産出させるために必要であり、適切であろう。

だが、3節の調査からもわかるように、現実の文や発話では、そのような「単純な文」「純粋な文」はあまり使用されていない可能性があり、指導においても「単純な文」「純粋な文」を越えて、「複雑な文」「雑多な文」を作り出せるようにしていくことが必要になる。

市川 (2007) は、図3を示した上で、「文型指向型」の機械的な練習の段階から、「内容指向型」のコミュニケーション重視の練習に至る途中に、「意味理解をともなう練習」「発展的文型練習」の必要があることを指摘している。

では単純な文型を、どのように「拡大」させていくことができるだろうか。今回取り上げた受動表現については、次のような点が指摘できる。

第一は、連用節、とくに「て」節と組み合わせた受動表現をより積極的に導入することである。「て」節に受動表現が来る場合も、また「て」節を受けて

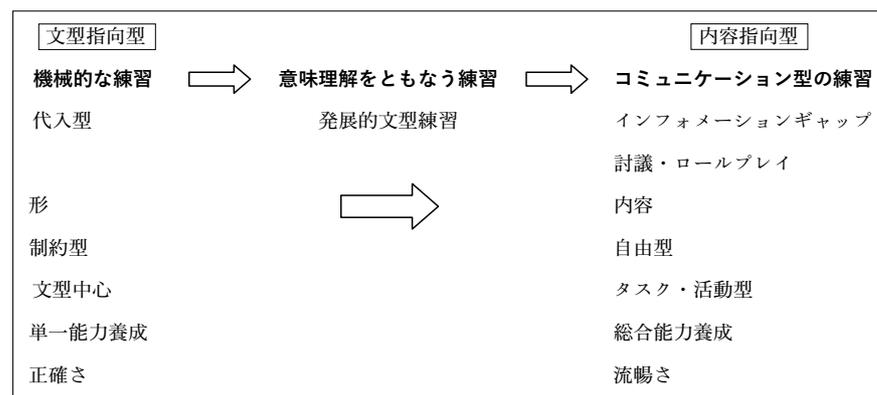


図3 練習の種類 (市川2007: 173より)

後行節 (主節) に受動表現が来る場合もいずれもよく使われる表現である。これは、一文において視点の一貫性を保つという受動表現の機能を指導することにもつながるだろう。受動表現を、理解だけではなく産出させるようにするためには「て」節を中心とした従属節内 (初級では「て」節のみで十分効果があると考えられる) での使用を、もっと意識して取り入れる必要がある。逆に言えば、「て」節などが十分に使えるレベルでなければ、自然な受動表現が産出できるようにはならない、ということになるのかもしれない。

単文末に受動表現が来る場合については、言い切りだけでなく、さまざまな文末表現と組み合わせるような指導が望まれる。特に「のだ」との組み合わせは実用性が高く、「のだ」の練習にもなる。「どうしたんですか」「足を踏まれたんです」のような応答は、談話における視点の一貫性を保つという働きを受動表現が果たしているものであり、受動表現を使用する重要な動機を自然に理解させることになるだろう。

また、単文末のテンス・アスペクト形式については、『みんなの日本語』『文型辞典』ともに「る」形の例文も積極的に取り上げていることがわかったが、「た」形に偏らない配慮は一層、必要であろう (cf 図4)。

連体節については、シナリオ調査では連用節には及ばないものの、単文末 (15

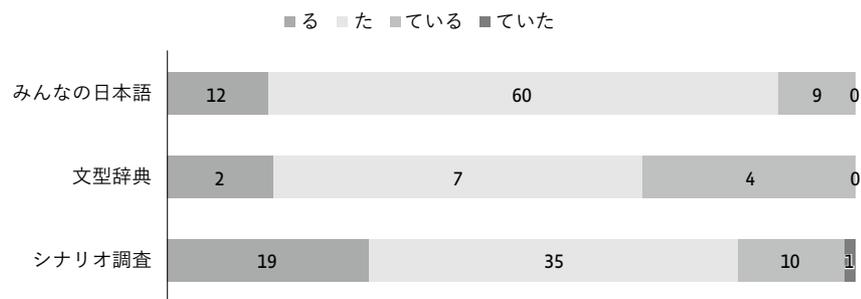


図4 単文末におけるテンス・アスペクト形式

%)よりやや多い割合(17%)で出現していた。「の」「こと」など形式的な名詞を用いたいろいろな文型との組み合わせを促すことは中上級レベルでも十分に意味ある基本練習となるであろう。

受動表現は初級の後半に扱われることが多く、難しい項目だと考えられており、それまでに学んだ多様な形態・形式・表現と組み合わせて使う指導をすることは、簡単ではないだろうが、こうした「拡大」文型練習は既習表現の復習としても意味がある。それが初級の段階では困難であるとしたら、中上級において再度、確認すべき事項と見てもよい。

5 おわりに

受動表現は、形態的・統語的・意味的・機能的にも困難な文法項目であると考えられる一方で、初級文法項目の中で受動表現は、複数のコーパス内で高頻度で使用される項目であるとの調査結果もあり(江田・小西2008)、このような受動表現をどのように教えるかは初級・中級文法教育の課題の1つである。この問題について考察するためには、まず現代日本語において受動表現がどのように使用されているか、ということ进行を明らかにする必要がある。そうした観点から本研究は、シナリオをデータに調査を行い、主に単文・複文という観点から分析した。

その結果、受動表現は15%が単文末で、85%が複文(従属節または主節の述語)の中で用いられていた。特に複文の連用節の述語として用いられる場合は52%と半数を超え、さらにその半分は、「ほめられてうれしくなった」のような「て」節の述語に受動表現が現れる場合であった。また文末に使われる場合も、テンス形式や、終助詞を含めたさまざまな文末表現との多様な共起が見られた。

ただ、こうした点は必ずしも受動表現の特徴とは言えない可能性が高い。「て」節は受動表現との共起に限らず最も多用される従属節であろうし、受動表現以外の文(発話)にも「のだ」や終助詞が多く伴われるはずである。今回の調査結果は、受動表現が持つ特徴を明らかにするものではなく、受動表現をどのような文型の中で扱うことが望ましいかということを探るための実態調査の1つと考える。

このような調査結果を、既存の日本語教科書および指導参考書に見られる例文と比較した。両者には当然ながら相違点があり、シナリオに出現した文型は、教科書の文型よりも形態的にも表現形式の上でもバリエーションがあった。だがその多様性は、日本語教科書から見ると既習の文法項目であることがほとんどである。そうした既習の文型・文法項目を組み合わせる「拡大」文型練習を取り入れることで、より自然な受動表現を理解・産出できることが期待される。

今回の調査は1種類のシナリオを用いただけの限定的なものであり、今後は調査の目的を考慮した上で、コーパスを変えての調査が求められる。また、受動表現以外の文法項目においても、どのような「拡大」文型が可能であるかを調査に基づき分析していくことが望まれる。

〈学習院大学〉

参考文献

- 市川保子(2007)「第9章 SFJ再考—文法練習を中心に—」藤原雅憲・西村よしみ・才田いづみ他(編)『シリーズ言語学と言語教育第10巻 大学における日本語教育の構築と展開 大坪一夫教授古希記念論文集』pp.160-180. ひつじ書房
- 奥津敬一郎(1983)「何故受身か?—視点からのケース・スタディー—」『国語学』132, pp.65-80. 国語学会

江田すみれ・小西円（2008）「3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使頻度調査とその考察」『日本女子大学紀要 文学部』57,pp.1-28. 日本女子大学文学部
野田尚史（1991）『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
前田直子（2009）『複文の研究—条件節および原因・理由節の記述的研究』くろしお出版
益岡隆志（1987）『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版

【用例出典】

山田洋次（1976）『男はつらいよ <1>』『男はつらいよ <2>』『男はつらいよ <3>』,（1977）『男はつらいよ <4>』『男はつらいよ <5>』『男はつらいよ <6>』,（1979）『男はつらいよ <7>』,（1981）『男はつらいよ <8>』『男はつらいよ <9>』立風寅さん文庫